

●ぶれいくさろん●

リレートーク【1】

ポリテクカレッジ浜松 桑田 浩二

交差点で人が停まるようになれば世界一 (中国のIT関連企業を視察して)

1月中旬、出張先のウガンダから帰国し、溜まりに溜まったメールを確認していると、新年のあいさつの中に「お願い」という文字でひときわ目立つタイトルがあったので、見ずに削除しようかとも思ったがそういうわけにもいかず、開いた。メールの中身はポリテクカレッジ秋田の佐藤さんからのリレートークの依頼であった。断ろうとも考えたが、新年早々のメールに「お断りする。」という文言を入れたくなかったため、こうして文を書いている次第である。

さて、内容については、今最も注目されている中国のIT関連企業を見学した際に感じたことを述べたいと

思う。しばらくの間おつきあいいただければ幸いである。

ウガンダ出張からの帰り、ロンドン発成田行き航空機の中で、ふと、「中国のIT関連企業に見学に行けなだろうか?」と思った。早速その旨を、帰国後、学生時代のサイクリング部を通して友人になった内山氏(拓殖大学卒 現穀石法律事務所 勤務)にメールで送った。返事は予想に反して「いいよ。」という軽いものだった。

3月22日に北京に到着し、23日、24日はツアーで故宮博物院や万里の長城を観光した。ツアーで周った

場所は、ITなど全く意識させない、イメージどおりの中国があった。また25日の自由行動の際、北京の下町を1人歩いた。そこには、路地で子どもたちが遊び、近所の老人たちがそれを見守るといような、私が子どものころ（昭和40年代）とそっくりな光景があり、なんかタイムスリップしたような錯覚さえ覚えた。しかし、王府井周辺（北京で最もにぎわっている繁華街）に足を踏み入れたとたん、今まで見たものと全く違った世界に足を踏み入れたように感じた。若者は携帯電話片手にマックやスタバで戯れ、建物を見渡すと、高級ブランド店が軒を連ね、そして駐車場にはベンツやBMWなどの高級車が停まっていた。日本と全く変わらない。

北京自由行動最終日、以下の3社を見学させていただいた。すべて日系企業であるが、内山氏が案内兼通訳をしてくれるということで何の不安もなかった。

- ・三菱四通集成電路有限公司
- ・PeCaN
- ・NEC-SI

◇

まずは三菱四通。三菱電機合併の携帯電話等の生産企業である。こちらではLSIの製造課程を見せていただいた。日本製の機械で工場のすべてを構築しているため、雰囲気は全く日本と違いはなかった。

担当して下さった山本副部長は、中国は交差点で人が停まるようになれば（規律を守れば）世界の国になると強調された。

次にPeCaN。日本キャノンと北京大学出資の方正公司との合併のソフトウェア開発企業である。こちらではソフトウェア開発の様子を見せていただいた。日本のソフトウェア開発の様子と大きく違うところはブースでミーティングしている数が極端に少ないことと、ヘッドフォンをしながらコンピュータに向かっている社員が多い点である。担当して下さった木村氏がおっしゃるには、「グループでの開発が苦手なため、ミーティングが今のところ必要ない。」「中国は成果主義が多いので結果ができれば勤務態度はあまり気にしない。」とのことだ。

最後に、NEC-SI。NEC独資のソフトウェア開発企業である。ここでもソフトウェア開発の現場を見学さ

せていただいた。PeCaNと違い、雰囲気は日本のソフトウェア開発企業とそっくりである。NEC-SIは中国に進出して15年強と最も実績のある企業で、マネジメントも中国人が行っている。実績が長いということもあり、上記2社と比較して日本的な習慣が社員の身に付いている。このため、日本人が近い将来、最も危惧すべき、「企業が日本で従業員が中国人、そして業務展開方法が日本流」という状況を見た気がする。

今回の見学と担当者のご意見から下記の点を学んだ。

1. 中国の大学生数と日本の大学生数はほぼ同じだが、中国の学生すべてが学習に対し貪欲である。
2. 中国の学生は英語力があり、しかも日本語も必要であれば1年でペラペラになる（ほど勉強する）。
3. 中国人はグループで業務展開することは苦手であるが、教育により改善が可能である。
4. 中国は2極化が激しいが、われわれが意識しないといけないのは優秀な1割（日本の人口以上）である。

◇

これらのことから、いかに中国に負けない学生を養成するかという課題をみやげに帰国した。次回はウガンダへの短期派遣で公私ともにお世話になった東海大学の河瀬さんです。よろしくお願ひします。



(筆者前列右)